

論文審査の結果の要旨

氏名：渡 部 愛

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：胃・大腸重複癌の同時性・異時性治療の比較

審査委員：（主査） 教授 後藤田 卓 志

（副査） 教授 櫻 井 裕 幸 教授 逸 見 明 博

教授 石 井 敬 基

本論文タイトルは「胃・大腸重複癌の同時性・異時性治療の比較」で、異時性胃・大腸癌は早期癌として発見される傾向があり同時性と比較して予後が良好であることを示した。なお、原著論文は *American Journal of Clinical Oncology* 35(5) 407-410, 2012 に既に掲載済みである。

日本人の主な死因は悪性腫瘍で、全国がん統計によると部位別罹患数は1位が大腸癌、2位が胃癌、3位が肺癌となっている。一方で、内視鏡がん検診の普及で癌患者の生存率は改善し生存期間が延長することで重複癌の問題が指摘されている。

本研究は遡及的検討であるが、日本大学医学部附属病院における25年間に治療を行った胃と大腸の重複癌117例（既報では96例であったが直近5年間を加えて追加検討した）を用いて罹患時期について検討した。観察期間内に胃癌あるいは大腸癌と診断され治療された症例は5,491例で胃大腸重複癌の発生割合は2.1%であった。同時性胃・大腸重複癌が59例、異時性胃大腸重複癌は58例でほぼ同割合であった。5年生存割合は同時性重複癌が61.3%、異時性重複癌で81.7%であった（ $p=0.03$ ）。異時性重複癌において、胃癌先行症例は32例、大腸癌先行症例は26例であった。第一癌から第二癌までの間隔は両群で有意差を認めなかった（ $p=0.13$ ）。5年生存割合は胃癌先行群で89.2%、大腸癌先行群では72.4%と有意差を認めなかった（ $p=0.17$ ）。

研究の *limitation* として、遡及的検討であること、同時性重複癌には発見時の病期にばらつきがあるが異時性重複癌は術前検査でスクリーニングされており両者を単純に比較することが妥当であるか、異時性重複癌は第一癌の治療後であることから定期的な検査介入がなされていること、などが挙げられる。

内視鏡検診によって第一癌がより早期に発見され長期生存が得られている。また、癌患者は一般人口と比較して第二癌を発生する可能性が高い。つまり、第一癌の治療後も定期的な消化管検査が求められる。一般的に外科切除後の患者のフォローは5年間で標準的であるが、今回の研究から術後5年以降も第二癌の早期発見を目的としたスクリーニング介入が望ましいと結論している。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成30年11月28日